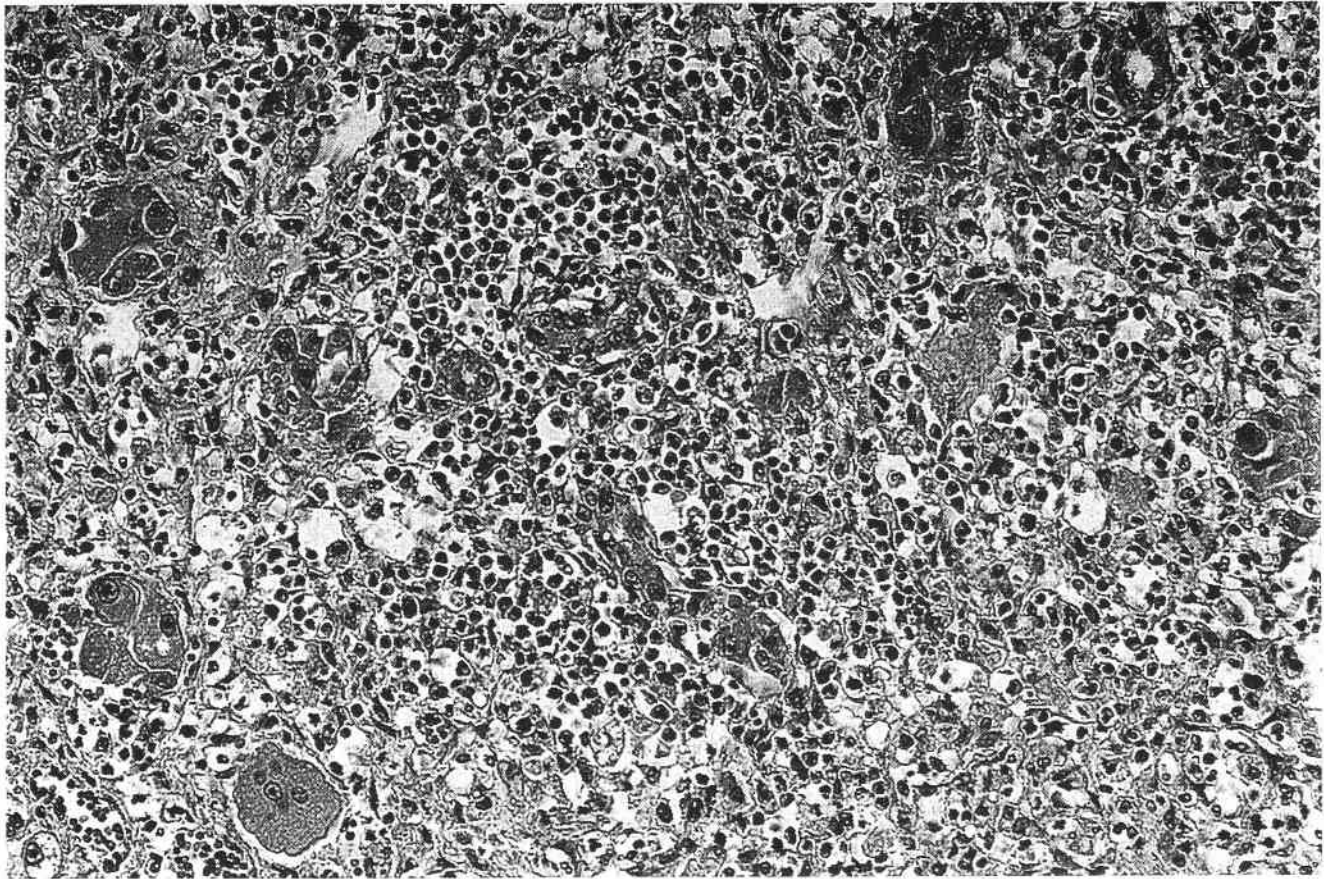


猫の肝臓

東京大学農学部獣医病理学教室出題 第39回獣医病理学研修会標本 No. 751



動物：猫，日本猫，雌，1歳6ヶ月。

臨床事項：開業獣医にて胸水貯留および胸腔内腫瘤を指摘され，本学ベテリナリー・メディカル・センターに来院。X線検査の結果，胸腺型リンパ腫と診断された。血液検査では，GPT>1000，GOT>1000，T-Bil 17.0と肝酵素の異常値を示し，肝エコーレベルの上昇も認めた。FeLV (+)，FIV (-)。斃死前日より神経症状を呈していた。

肉眼所見：肝臓は全体的に鬱血，小葉構造明瞭。内側右葉に径約1cm，方形葉に径約7mmの淡褐色結節。皮下，粘膜，大網で黄疸顕著。淡黄色の胸水(100ml)，腹水(200ml)貯留。縦隔に黄白色腫瘤3個(径約2cm 2個，径約1cm 1個)。

組織所見：縦隔の腫瘤では異型リンパ芽球様細胞が瀰漫性に増殖しており，リンパ肉腫と診断した。肝臓では中心静脈周囲性に鬱血，壊死が見られ，間質では胆管増生が見られた。肝細胞は膨化し，合胞性の巨細胞が散見された。また，胆汁栓も多数形成されていた。グリソン鞘ではリンパ球，好中球，Mφなどの炎症細胞に混ざって縦隔腫瘤と同様の腫瘍細胞が散見された。結節部でも基本的には同様の組織

像を呈していたが，浸潤細胞は好酸球とMφが主体で，線維増生がやや強度であった。結節内の肝細胞にも膨化，合胞化が見られた(写真)。合胞化肝細胞の電顕観察の結果，ミトコンドリア，小胞体など細胞内小器官の膨化が見られた以外，特に変化がなかった。抗FIV，抗FeLV，抗FeSV，抗FPV，抗FHV抗体を用いた免疫染色はいずれも陰性であった。本症例の後に観察した別の症例(日本猫，去勢雌，2歳，胸腺型リンパ腫の既往歴あり)でも，肝細胞の合胞化による巨細胞形成，炎症細胞浸潤及びリンパ肉腫細胞浸潤という本例と類似した所見が見られた。

診断名：リンパ肉腫細胞浸潤を伴う巨細胞性肝炎

考察：本病態の原因は特定できなかったが，FeLV (+)，胸腺型リンパ腫，年齢などの臨床背景が類似している2症例で同様の肝病変が認められたことから，FeLV感染に関連した病変の可能性が考えられた。また，治療に用いた抗腫瘍剤の影響も考慮すべきかもしれない。